

## JTABPの機制について

塹江 清志, 水野 和夫\*

生産システム工学科

(1994年9月2日受理)

## On the Mechanism of Japanese Type A Behavior Pattern

Kiyoshi HORIE and Kazuo MIZUNO\*

Department of Systems Engineering

(Received September 2, 1994)

The purpose of this study is to discuss the mechanism of JTABP (i.e., Japanese Type A Behavior Pattern). In America and Europe the personality traits of TABP (i.e., Type A Behavior Pattern) are strong "hostility" and "aggressiveness". On the other hand those of JTABP are weak "hostility" and "aggressiveness" and a strong "depressive" tendency. The following is a discussion of the mechanism by which each characteristic trait is linked to TABP.

1) In American and European societies on the base of the principle of "competitive individualism" persons who possess strong "hostility" and "aggressiveness" exhibit more of a "struggling" behavior pattern. This "struggling" behavior pattern becomes the so called "TABP" (i.e., "speed and impatience", "hard-driving and competitiveness", and "job-involvement").

2) Traditionally, Japanese have lived with an emphasis on human relations. Persons who have "depressive" personality traits are apt to depend excessively on human relationships. Specifically, human relations in the workplace are most important to Japanese employees. Therefore, employees with "depressive" personality traits tend to become excessively involved in the tasks which are imposed on them because of human relationships in the workplace. As a result they then exhibit "TABP".

## 和文要旨

本論文の目的は、「日本的タイプA行動パターン (Japanese Type A Behavior Pattern; JTABP)」の機制について考察することである。

欧米における「タイプA行動パターン (TABP)」の性格的特色は「敵意性」, 「攻撃性」が強いことである。それに反して、「JTABP」の性格的特色は「敵意性」, 「攻撃性」が弱く、そして、「抑うつ」傾向が強いことである。

それぞれの性格的特色が、如何なる機制で「TABP」に結びつくかについての考察は以下のものである。

1) 競争的個人主義の原理の欧米社会では、「敵意性」, 「攻撃性」の強い個人は、より「闘争的」な行動パターンを示す。この「闘争的」な行動が、いわゆる「TABP」,

すなわち、「性急さ・短気」, 「猛烈・競争的」, そして、「職務熱中」につながる。

2) 日本人は、伝統的に人間関係志向に生きてきた。「抑うつ」性格傾向の者は、過度に人間関係に依存しがちである。日本人の従業員にとって、特に、職場の人間関係は最も重要である。それゆえ、「抑うつ」な従業員は、職場での人間関係を通して彼に課せられた課業に過度に没入する。その結果、彼は「TABP」を示すことになる。

## 1. 本論文の目的

## 1.1 TABP

CHD (Coronary Heart Disease), CAD (Coronary Artery Disease), IHD (Ischemic Heart Disease) (冠

状動脈性心疾患、虚血性心疾患)ガストレスによって生起せしめられるとき、それを促進させる危険因子として、高血圧、高脂血症、喫煙などが同定された。Friedman M.とRosenman R.H.<sup>[1]</sup>は、患者に共通する「行動様式」に着目しCPBP (Coronary Prone Behavior Pattern) (心疾患になりやすい行動パターン) という概念を想定し、それが「TABP (Type A Behavior Pattern: タイプA行動型)」であるとして以来TABPの研究が開始されたことは周知のところである。そして、現在では、TABPは他の危険因子とは独立のCHDの危険因子と一応考えられていることもよく知られている。

### 1.2 日本での研究の発端

このTABPについての日本での研究の発端は以下のようである(西松<sup>[2]</sup>)。

1980年の「日本心身医学会総会」における長谷川ら<sup>[3]</sup>によるTABPの存在の指摘、そして、1981年の同会における五島会長のTABPについての講演(五島<sup>[4]</sup>)及び田川ら<sup>[5]</sup>の研究発表を発端にして、日本でのTABPについての本格的研究が開始された。

### 1.3 JTABPの提唱

福西ら<sup>[6]</sup>によれば、TABPについての研究が、米国を中心に展開され、約10年後にこの概念が日本に導入され、日本での研究が開始されたが、最初は、比較文化的見地からの臨床研究はなされなかったという。しかし、日本での研究の進展につれて、TABPの特性に関して米国でのそれとは異なった特性が、日本でのTABPについて見い出されるようになったとのことである。

つまり、「JTABP (“Japanese Type A Behavior Pattern”: 日本的タイプA行動パターン)」が発見されるようになった(Fukunishiら<sup>[7]</sup>)という。

このことから、西松<sup>[2]</sup>によれば、保坂ら<sup>[8], [9]</sup>によって「JTABP」という概念が提唱されるに至ったという。

### 1.4 本論文の目的

本論文の目的は、このJTABPについてのこれまでの研究による資料のいくつかを検討し、JTABPについての機制について考察することである。

## 2 JTABPの特徴について

前述のようなJTABPの概念の導出によって過去約10年JTABPについての研究が日本で行われてきた。そして、米国でのTABPの特性との比較においてJTABPのそれについての研究がなされてきたわけであるが、JTABPの行動特性、及び、それと関連する性格特性な

どのJTABPの特徴について以下にいくつかの資料を概観して検討する。

### 2.1 保坂の資料

保坂<sup>[10]</sup>は、IHD患者の特徴的な行動パターンについての因子分析の結果、以下の3つの因子を抽出している。

第1因子: 攻撃性, 競争性, 気短さ

第2因子: 義務・責任感, 熱中性, 徹底性

第3因子: 几帳面さ, 自己の仕事に対する高い要求水準

そして、彼は、第1因子に表現されている行動特性は、米国でのTABPにおけるものと同一であるとし、第2, 3因子によって表現されている行動特性は米国でのTABPにはみられないものであり、したがって、これらの行動特性がJTABPの特徴であるとしている。

比較の問題として、米国でのTABPに対し「敵意性」(第1因子によって表現されている)が低く、「仕事への執着性」(第2, 3因子によって表現されている)が強いことが、JTABPの行動的特徴であると云う。

更に、第2因子に表現されている行動特性としての「執着性」、第3因子に表現されている「真面目さ」に関連する性格特性は、それぞれ「執着気質」、「メランコリー親和型性格」であるとしている。

「執着気質」と「メランコリー親和型性格」とは、「うつ親和性性格(うつ病前性格, そううつ病前性格, 前うつ性格)」の構成成分であるから、JTABPの性格的特徴は、保坂<sup>[10]</sup>の資料からは、「うつ親和性性格」であるとなる。

### 2.2 前田の資料

前田<sup>[11]</sup>は、JTABPの行動的特徴は、「敵意性」、「競争性」の低さであるとしている。

### 2.3 田川らの資料

田川ら<sup>[12]</sup>は、「東海大式生活健康調査票」によるIHD患者の特徴的な行動パターンを列挙し、行動目録的にみる限り、行動特性に関して、欧米でのTABPのそれとJTABPのそれとは類似しているという。

しかし、因子分析による因子構造から考察すると、JTABPの特徴がみられるという。

Zyzanskiら(1970)のJAS (Jenkin's Activity Survey) を使用しての米国での因子分析の結果、3つの因子、そなわち、①Hard-driving and Competitive, ②Job Involvement, ③Speed and Impatienceが抽出されるが、日本のIHD患者の場合に抽出される3つの因子の中の第3因子は米国での3つの因子のいずれにも対応せず、日本人に特異的な因子であると指摘している。

この第3因子として出現している「日本人の仕事に対する態度や価値観（「義務感」、「責任感」、「真面目さ）」がJTABPの行動的な特徴であると云う。

## 2.4 福西の資料

福西<sup>[13]</sup>は、JTABPの行動的特徴として、「仕事への熱心さ」を指摘し、これを支える性格的特徴として、「執着気質」をその構成要素とする「うつ親和性性格」を示唆している。そして、精神医学的には、JTABPの概念の中心として「うつ親和性性格」を同定している。

## 2.5 服部らの資料

服部ら<sup>[14]</sup>は、欧米でのTABPに関する研究においては、1980年にWilliamsらによってTABPの構成要素の1つである「敵意性 (Hostility)」の重要さが指摘されて以来、「敵意性」、「怒り (Anger)」を重視する方向で研究が進められていると指摘する。これに反して、日本での研究では、JTABPの行動的特徴としては、「敵意性」はみられなくて、「熱中性」、「仕事熱心」、「徹底性」、「対人氣配り」などが見い出され、これらの行動的特徴を出現させる「うつ親和性性格」をJTABPの性格的特徴として指摘している。

## 2.6 まとめ

以上の諸家の資料より、JTABPの特徴について以下のようにまとめることができる。

- (1) 行動目録的にみると米国でのTABPの行動特性とJTABPのそれとは類似している。
- (2) 因子分析の結果から因子構造的にみると、米国でのTABPに比してJTABPの行動的特徴は、「敵意性」が低く、「仕事への執着性」が強いことである。
- (3) JTABPの性格的特徴は、「仕事への執着性」に出現する「うつ親和性性格」である。

## 3 「うつ親和性性格」とJTABPの関係について

JTABPの性格的特徴として、前述のように、「うつ親和性性格」が指摘された。したがって、ここでは、両者の関係についてこれまでのいくつかの資料を参照することによって検討する。

### 3.1 「うつ親和性性格」について

服部ら<sup>[14]</sup>は、「うつ親和性性格」について以下のことを述べている。

Kretshmer (1921) のそううつ病の性格類型 (循環気質) より「うつ病の病前性格 (うつ親和性性格)」についての研究が開始されたが、下田<sup>[15]</sup>はその性格を「熱

中性」、「徹底性」、「強い責任感」、「率直」、「律儀」などによって示される「執着性」と同定した。一方、Tellenbach<sup>[16]</sup>は、「几帳面さ」、「秩序志向性」、「対人氣配り」などによって示される「メランコリー親和性性格」を「うつ親和性性格」として同定した。

したがって、「うつ親和性性格」とは、仕事などにおいて示される「執着性」と対人関係などにおいて示される「メランコリー親和性性格」とから成るものであるとしている。

福西<sup>[13]</sup>も「うつ親和性性格」を「執着気質」と「メランコリー親和性性格」とを合わせたものとしている。

### 3.2 「うつ親和性性格」とJTABPの関係について

#### (1) 田川らの資料

田川ら<sup>[12]</sup>は、「うつ親和性性格」とJTABPとの関係について以下のように考察している。

1. 「うつ親和性性格」は、「執着気質」、「メランコリー親和性性格」とから成るが、JTABPについての因子分析によって抽出される第2, 3因子はそれぞれ下田<sup>[15]</sup>の「執着気質」、Tellenbach<sup>[16]</sup>の「メランコリー親和性性格」の特性に関連づけることができる。しかし、JTABPにおいても示される「攻撃性」は、「執着気質」、「メランコリー親和性性格」とは結びつかない。

2. 「うつ親和性性格」としては、もう1つの性格特性である「マニー親和性性格」が考えられるが、これはJTABPにおいても示される「攻撃性」と関連づけることができる。

3. 「メランコリー親和性性格」の2つの亜型（「平均志向型」、「過剰規範型」）の「過剰規範型」がよりJTABPに関連すると考えられる。

4. 結論として、JTABPは、「うつ親和性性格」の枠内で理解することができる。

#### (2) 福西の資料

福西<sup>[13]</sup>は、以下のように考察している。

##### 1. 「抑うつ症状」との関係について

TABPと「抑うつ症状」との間の関連は欧米においては「正」の関係がみられるようであるが、日本においては一義的な関係がみられない。

##### 2. 「うつ親和性性格」との関係について

日本での資料においては、TABPと「うつ親和性性格」との間で「正」の関係が、CHD (Coronary Heart Disease: 冠状動脈性心疾患) 患者、一般健康人の両者においてみられ、その関係の強さは、CHD患者においてより強いと云える。

「抑うつ症状」と「TABP」、「うつ親和性性格」との間には関連がみられない。

3. 「執着気質」, 「メランコリー親和性性格」の両方において日本でのTABPと米でのTABPとでは差がみられないが, 「敵意性」については, 米でのTABPの方がより強い。したがって, TABPの基本的な構成因子の在り方については, 日米間に差はないが, 構成因子の表出強度においてちがいがみられ, JTABPは「敵意性」において低いことである。(このことからすれば, 米でのTABPも「うつ親和性性格」の枠内で理解できることになる。)

#### (3) 田川の資料

田川ら<sup>[12]</sup>は, 「うつ親和性性格」とJTABPの関連を「TABPスクリーニング・テスト」, 「抑うつチェックリスト」を用いて, 4,382名(男子, 2,239名, 女子2,143名)の健常者について検討し, 両者の間で「正」の関係(抑うつ者の%に関して, B1群で0.8%, B2群で4.9%, A2群で6.1%, A1群で5.9%)を見い出している。

#### (4) 桃生らの資料

桃生ら<sup>[13]</sup>は, 人間ドック受診者537名(男子308名, 女子229名)に対して「A型行動パターンスクリーニングテスト」, 「東邦大式抑うつ尺度(SRQ-D)」を用いて検討し, 「タイプA」と判定された被検者でのSQR-Dでの「問題者(うつ病の疑いありの者と境界領域の者)」の割合(%)の方が, 「タイプB」のそれより有意に多かったことを確認している。

#### (5) 服部らの資料

服部ら<sup>[14]</sup>は, 「うつ親和性性格」(「うつ親和性性格傾向尺度(Depression Related Personality Trait Scale, DRP尺度)」で測定), 「うつ症状(状態)」, TABPの3者の関係を検討して以下の知見を得ている。

##### 1. CHDにおけるTABPとDRPとの関係について

男性の冠動脈疾患(CHD)患者212名に対しJAS Form CによってTABPを測定し, CHD患者においては, 「うつ親和性性格」とTABPの間には有意な「正」の関係がある。それゆえ, 「うつ親和性性格」は, JTABPを形成する性格要因の1つである。

##### 2. CHDにおけるTABPと「うつ状態」との関係について

木村ら(1988)の資料においては, 人間ドック受診者においては, TABP(JASによる)とCMI(Cornell Medical Index)の「抑うつ」とは「負」の関係がみられる。

保坂(1990)の資料においては, TABP(TABP・スクリーニングテスト)と「抑うつ(抑うつチェックリスト)」との間には「正」の関係がみられる。

本研究では, SDS(Self-rating Depression Scale)による「うつ状態」とJASによるTABPとの間には相関がみられない。また, 「うつ状態」と「うつ親和性性格」との間にも相関が認められない。

### 3.3 まとめ

以上の諸家の資料より, 「うつ親和性性格」とJTABPとの関係について以下のようにまとめることができる。

〈1〉 JTABPは, 「うつ親和性性格」と関連づけることができる。

〈2〉 JTABPと「抑うつ症状」との間には, 少なくとも一義的な関係は認められない。

〈3〉 「うつ親和性性格」と「抑うつ症状」との間には, 少なくとも一義的な関係は認められない。

## 4 JTABPの機制について

これまでのことから, JTABPは「うつ親和性性格」と関連し, 欧米でのTABPは, JTABPと比較して行動的特性として「敵意性」の高さをその特徴とすることが明らかになった。それで, ここでは, このことを前提として, JTABPの機制について, すなわち, 「うつ親和性性格」が, 如何なる「機制」を介してJTABPが発現されるかについて考察する。

### 4.1 「仕事」に対する「動機づけ」の機制について

云うまでもなく, TABPの対象はいわゆる「仕事」である。つまり, 社会の中で自己に課せられた職業としての「仕事」を遂行するに当って, ある特定の人々によってある特定の行動様式である「TABP」という行動様式が発現されるのである。

そして, 前述のように, JTABPは「うつ親和性性格」と関連づけられた。換言すれば, 「日本人」においては, 「うつ親和性性格」者は「JTABP」を発動される傾向があるとされたのである。

「うつ親和性性格」者は, 欧米人にも当然存在するはずである。したがって, 彼等が「仕事」に「動機づけ」られるときは, 「うつ親和性性格」者のこれまでに述べてきた行動特性から云って「執着性」と「メランコリー親和性性格特性」とをもって仕事に取り組むので「JTABP」を示すはずである。しかし, 欧米での「TABP」においては, 「うつ親和性性格」がみられないということであった。彼等の場合は, 「敵意性」, 「攻撃性」の強さが示されたのであった。

したがって, 日本人と欧米人との比較という観点から端的に云えば, 日本人においては, 「うつ親和性性格」者が, 欧米人においては, 「攻撃性」, 「敵意性」の大きな

る者が、「仕事」に「過度」に「動機づけ」られて、その結果、ストレス症状を増大せしめ、疾患を招来せしめると考えられるのである。

それゆえ、「仕事」に「過度」に「動機づけ」られるときの機制が日本人と欧米人とでは異なるのである。このことから、「動機づけの機制」という観点からJTABPの機制を理解できると思う。

#### 4.2 欧米人の「仕事」に対する「動機づけ」の機制について

欧米社会が歴史的に「力の原理」(「男(父)性原理」)で規制されてきた、そして、現在でもそうであることは周知のところである。「力」(「能力」,「有能さ」)に至る価値を置くとき、欧米人の「生きがい」は、自己の人生において自分が如何に「有能」であるかを証明することである。自己の有能さ、能力は専ら自分の職業での「仕事」の上での「業績」によって評価される。

「優勝劣敗」の思想は、苛烈な「競争的個人主義」(特に、米国の場合)を育み業績を競う社会を生む。したがって、このような社会では、自己の「能力」を誇示したいという欲求に基づいて「仕事」への「動機づけ」がなされる。それゆえ、「攻撃性」,「敵意性」の大なる人間は、他者に対して優越したいという欲求に基づいて能力競争の次元から「仕事」に対して「過度」に「動機づけ」られることになる。ここに、欧米人においては、「攻撃性」,「敵意性」の大なる者が、「仕事」への「動機づけ」という次元を介して「TABP」に結びつくと考えられるのである。

#### 4.3 日本人の「仕事」に対する「動機づけ」の機制について

##### ① 「人生の場」としての「職場」

塹江<sup>[18]</sup>は、「日本的雇用制度」を最も典型的に具現化している「終身(長期)雇用制度」,「年功序列(従業員処遇)制度」,「福利厚生制度」,「企業別(内)組合制度」の従業員個々人にとっての意味・意義を考察し、これらの制度が、従業員個々人を「全人生」,「全人格」,「全生活」において雇用し、かつ、彼の「組合員(労働者)意識」を「従業員意識」に包摂するものであるとした(このような雇用の在り方を中根<sup>[19]</sup>は、「丸抱え」方式と称している。)。このような雇用制度の下では、従業員個々人にとって心理的には「職場」は「人生の場」となる。

##### ② 課題としての「職場」の「生きがい」

「生きがい」という言葉は日本語にしかないという(神谷<sup>[20]</sup>, 見田<sup>[21]</sup>)。ということは、日本人のみが「生きがい」を意識的に日常生活を通して、そして、生涯を

通じて古来より問い続けていることになる。

人生に「生きがい」が不可欠であり、そして、「職場」が「人生の場」であることから、日本人の従業員個々人にとって「職場」の「生きがい」が生にとって必須の課題となる。

##### ③ 日本人の「生きがい」としての「職場の人間関係」

土居<sup>[22]</sup>は、日本人の罪悪感の在り方についての考察より、日本人にとっての「人間関係」は、欧米人にとっての「神」に相当するものであるとしている。見田<sup>[21]</sup>は、神とは人間存在に「生きがい」を付与するものであるとしている。

木村<sup>[23]</sup>は、日本人個々人の存在の在り方、ということは、生の在り方は、根源的には「人と人との間」にあるとしている。

この土居<sup>[22]</sup>, 見田<sup>[21]</sup>, 木村<sup>[23]</sup>の言より、塹江<sup>[18]</sup>は、日本人の「生きがい」は、「人間関係」にあるとし、中根<sup>[19]</sup>の主張する日本人の人間関係様式としての「直接々触の人間関係」と前述のように日本人が職場の生きがいを不可欠なものとすることから、有職者の日本人の「生きがい」は、彼の「職場の人間関係」にあるとしている。

欧米社会の企業の欧米人の従業員個々人にとって、彼の職場での人間関係は彼の物質的・身体的生にとってしか重要でないが、日本人の場合は、彼の精神的・心理的生にとっても重要な意味を持つのである。ここに職場の人間関係の意味・意義のちがいが存在するのである。

##### ④ 「受容の原理」に生きる日本人

欧米社会の「力の原理」に対して、日本社会、日本人が歴史的に「受容の原理」(「女(母)性原理」)(厳密には「(受容されること=「甘え」)の原理)で規制されてきた、そして、現在でもそうであることは自明のことである。自己の「力」を誇示することに至上価値を置き、それを「生きがい」とする欧米人とちがって、日本人は、自己存在、自己の生が他者によって「受容」されることに価値を置き、そして、そこに「生きがい」を感じるのである。

##### ⑤ 日本人の「仕事」に対する「動機づけ」の機制

これまで問題としてきた「仕事」とは、現実的、そして、具体的には、職場での組織(究極的には人間関係)の中で位置づけられ、そして、それを通して従業員個々人に対して遂行することを期待されて課せられた「仕事」のことなのである。この仕事をどのように達成するかが、彼が職場の人間関係の中でどのように「受容」されるかに直結するのである。職場の人間関係の中で「受容」されることによって職場での「生きがい」を調達するとい

う日本人の精神構造においては、「仕事」に「執着」,  
「熱中」せざるを得ないのである。

したがって、日本人においては、「生きがい」欲求に  
基づいて「仕事」への「動機づけ」がなされるのである。  
とすれば、(職場の)人間関係において、他者から「受  
容」されたいという欲求が強い人程、(職場での)「仕事」  
に「過度」に「動機づけ」られるということが成立する  
はずである。

「うつ親和性性格」者とは、他者から「受容」されたい  
という欲求が強い人のことであるとすれば、ここに  
「うつ親和性性格」者が「過度」に「仕事」に「動機づ  
け」られうるということが理解でき、JTABPの機制について  
の説明が可能になると考えられる。

#### ⑥ そううつ病親和性人格構造の基本特性

飛鳥井<sup>[24]</sup>は、病気と人格との関係において病前性格  
論を展開し、そううつ病者の病前性格について考察し、  
そううつ病親和性人格構造の基本特性、すなわち、「う  
つ親和性性格」の基本特性に言及している。彼によれば、  
この性格の基本特性は他者との「一体化願望」であり、  
ここから由来する「対他志向性」であるとしている。

したがって、この性格の所有者は他者から「受容」さ  
れることによるのみその「一体化願望」が充足される  
わけであるから、当然「受容」されたいという欲求が強  
いはずである。

それゆえ、彼がこの欲求に基づいて「仕事」に「過度」  
に「動機づけ」られるとき、JTABPという行動様式が  
発現されることになるのである。とすれば、ここに仕事  
への動機づけという観点から、「うつ親和性性格」の  
JTABPへの機制、すなわち、本論文の課題である  
「JTABPの機制」が理解できると考える。

#### 参考文献

- [1] Friedman, M. and Rosenman, R. H.: Association of specific overt behavior Pattern with blood and cardiovascular findings: Blood cholesterol level, blood clotting time, incidence of arcus senilis and clinical coronary artery disease, J. Am. med. Ass, 169, 1286-1296, 1959.
- [2] 西松能子: A型行動パターンと前うつ性格—精神科医の立場から—, タイプA, 4(1), 32-37, 1993.
- [3] 長谷川浩, 木村登紀子, 関口守衛, 他: 冠状動脈疾患患者のパーソナリティ特性, 日本医事新報, 2993, 43-49, 1981.
- [4] 五島雄一郎: 虚血性心疾患と行動パターン, 心身医学, 22, 374-379, 1982.
- [5] 田川隆介, 保坂隆, 大須賀等, 他: A型行動パターンと虚血性心疾患—冠状動脈所見における検討, 心身医学, 24, 203-208, 1984.
- [6] 福西勇夫, 中川賢幸, 中村寛志, 他: タイプA行動パターンの日米比較研究, タイプA, 4(1), 67-71, 1993.
- [7] Fukunishi I, Hattori M, Hattori H, et al.: Japanese Type A behavior pattern is associated with "Types Melancholicus": A study from the socio-cultural viewpoint. Int J Soc Psychiat, 38, 251-256, 1992.
- [8] 保坂隆, 田川隆介, 大枝泰彰, 他: A型行動パターンと虚血性心疾患—質問表の作成, 心身医, 24, 23-30, 1984.
- [9] 保坂隆, 田川隆介, 杉田稔, 他: わが国における虚血性心疾患々者の行動特性—欧米におけるA型行動パターンとの比較, 心身医, 29, 527-533, 1989.
- [10] Hosaka T, Tagawa R: The Japanese Characteristic of Type a Behavior Pattern, Tokai J Exp Clin Med, 12, 287-303, 1987.
- [11] 前田聰: タイプA行動パターン, 心身医, 29, 517-524, 1989.
- [12] 田川隆介, 保坂隆: 日本的A型行動パターンと抑うつの関連性について, タイプA, 4(1), 16-20, 1993.
- [13] 福西勇夫: タイプA行動パターンと抑うつ: 総論, タイプA, 4(1), 11-15, 1993.
- [14] 服部正樹, 福西勇夫: タイプA行動パターンとうつの再検討—うつ状態とうつ親和性々格の関連より—, タイプA, 4(1), 24-27, 1993.
- [15] 下田光造: 躁うつ病について, 米子医誌, 2, 1-2, 1950.
- [16] Tellenbach H: Melancholie. Springer, Heidelberg, 1961. (木村敏訳: メランコリー, みすず書房, 1978)
- [17] 桃生寛和, 白川奏恵: タイプA行動パターンはストレス関連疾患全般の危険因子か, タイプA, 4(1), 21-23, 1993.
- [18] 塹江清志: 労務管理—日本の労務管理論—, 日刊工業新聞社, 1994.
- [19] 中根千枝: タテ社会の人間関係, 講談社, 1967.
- [20] 神谷美恵子: 生きがいについて, みすず書房, 1966.
- [21] 見田宗介: 現代の生きがい, 日本経済新聞社, 1970.
- [22] 土居健郎: 甘えの構造, 弘文堂, 1971.
- [23] 木村 敏: 人と人との間, 弘文堂, 1972.
- [24] 飛鳥井 望: 病気と人格—病前性格論を中心として—, 精神の科学, 2巻, 5, 169-208頁, 岩波書店, 1983.